

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】韓 相一

【所属】(助成決定時) 九州大学大学院人文科学府歴史空間論専攻 博士後期課程

【研究題目】 明治後期における日韓外交とエージェント

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、1896年から1905年までの日韓外交において活躍したエージェントに着目し、彼らの活動を検討することで、当時日韓両国が追求していた外交的成果や日韓関係の方向性がいかなるものであったのかを明らかにすることである。

本研究で注目する人物は、日本側の大三輪長兵衛(京釜鉄道株式会社取締役、韓国宮内府鉄道院総裁)と大江卓(京釜鉄道監査役、韓国宮内府水輪院総裁)、韓国側の朴琪淙(外部〈外務省にあたる〉主事、大韓鉄道会社設立)と玄暎運(宮内府繙訳官、同鉄道院会計課長)、玄暎運夫人の裴貞子である。彼らは本職の傍ら、日本側または韓国側のエージェントとして、日韓外交懸案の解決のために活動した。しかし、こうした活躍にかかわらず、彼らがエージェントとして活動することに至った経緯や行動原理、彼らに交渉を依頼した日本政府や韓国政府などのクライアントの意中を含めた総合的な研究が十分に行われていない。

【研究の内容・方法】(800字程度)

まず、前述の研究対象がエージェントとして活動することに至った経緯について説明する。日本人エージェントの大三輪と大江は、当時日本の財界で活躍していた人物であった。両者とも京釜鉄道敷設事業に参画したことからエージェントとして位置づけられた。具体的には、大三輪の場合、日清戦争の前から韓国の貨幣改革に関与しており、韓国皇帝(以下、高宗)と独自のつながりを持っていた(藤村1971)。しかし、大江の場合は、京釜鉄道敷設事業に参画し、その後在日韓国政治亡命者問題(以下、亡命者問題)の処理に関わったことで(森山1982、大西2023)、エージェントとして位置づけられた。

日本人エージェントの行動原理は、基本的に京釜鉄道敷設事業の推進にあったと考えられる。彼らはそのために韓国皇室に対して贈賄するなどの工作を繰り返した(『尾崎三良日記』)。そのなかで、韓国側の要望を受けて、前述の亡命者処理問題や日露戦中の伊藤博文招聘工作(韓2021)にも関与した。もちろん、日本政府の依頼に基づいて行動したこともあった。たとえば、大三輪の場合日露戦争開戦直前に、外務省政務局長山座円次郎の要請で韓国宮中の偵察のために赴いたこともある(藤村1971)。

つぎに、韓国人のエージェントについて述べる。朴琪淙はもともと日本通で釜山を中心に活動していたが、1898年に高宗の側近であった皇族李載純の斡旋により外部(外務省に相当)の役職を約束され上京した。玄暎運も慶應義塾で留学した経験のある日本通であるが、同年渡韓した伊藤博文の通訳を担当したことで、エージェントとして位置づけられた。朴の場合、勤皇主義者で日本との提携が韓国の独立維持に繋がるという考えのもとに行動していた(『上京日記』『都総』)。一方で玄は、高宗の後宮である嚴貴妃の側近であったと推定される裴貞子と結婚し(「貞子の略歴」「裴貞子実記」)、夫妻ともに政治的な出世するために行動していたと推察される(韓2021、韓2024)。

【結論・考察】（400字程度）

最後に、彼らのクライアントとも言える日韓両国が、いかなる意図をもってエージェントを通じて外交交渉を行ったのかという問題意識を踏まえたうえで、日韓が追求していた外交的な成果や日韓関係の方向性がいかなるものであったのかを確かめる。

日韓両国がエージェントを通じて外交交渉を行った理由は、両国の政治・外交的な目的を達成するためであった。日本は韓国に対する影響力を求めており、韓国（特に高宗）は、亡命者による政変といった政権への脅威要素を取り除くことを望んでいた。そのためエージェントを通じて交渉を進めることで、ロシアの南下という脅威を防ぎ、より発展的な両国関係の展開を図ろうとした。しかし、こうした試みは、①亡命者と日本人協力者によるテロ・政変事件、②韓国内における反日勢力の抵抗、③韓国の保護国化といった日本の対韓政策の変化によって、結果としてなし得ることができなかった。

日韓が追求した外交的な成果や日韓関係の方向性は、両国に残る政治外交的懸念要素を解消し、ロシアといった脅威に対抗することであった。ただし、その具体的な内容においては両国の齟齬があった。韓国側は独立国としての主権を保持しつつ、日本のみならず清国との提携を望んでいた一方で（「韓日中三国提携論」、현광호 2002）、日本は周知のとおり、帝国主義的な方法へ回帰した。こうした変化については、引き続き研究を進める計画である。

【参考文献】（公開年度順）

藤村道生(1971)「日韓議定書の成立過程—大三輪長兵衛韓国関係文書「諸事抄録」「渡韓始末録」史料解説として」(『朝鮮学報』61)。

森山茂徳(1982)「日清・日露戦間期における日韓関係の一側面：在日朝鮮亡命者の処分問題」(東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所記要』88)。

현광호(2002)『大韓帝國의 對外政策』신서원。

韓相一(2021)『大韓帝國の求めた伊藤博文—日露戦中の招聘工作から統監就任まで—』(『日本歴史』880)

大西比呂志(2023)『大江卓の研究』芙蓉書房出版。

韓相一(2024)『明治後期における日本の対韓政策の展開—1896~1907—』(博士学位論文(九州大学))。

【参考史料】（公開年度順）

趙重淵訳註「裴貞子実記」(『新東亜』18、1966年2月)

伊藤隆・尾崎春盛編『尾崎三良日記』中央公論社、1992年。

「貞子の略歴」(『外務省警察史』14、不二出版、1997年) pp.310-311。

부산근대역사관編『도총〔都総〕』부산근대역사관、2005年。

부산근대역사관編『上京日記』부산근대역사관、2005年。